

第51号
中央大学学会
国立支部
発行者 小島泰義
042-575-1454
<http://www.gakuinkai.com/kunitachi/>

第四十回 総会を迎えて

支部長 小島泰義



平成二十五年八月十八日、開催の定時総会におきまして支部長に選任され、就任し、早くも四年の任期を迎えることが出来ました。これも会員、役員のみならず、協力の賜物と、心よりお礼申し上げます。

その上、私、平成二十七年より二十八年度には、体調をくずし、病院の入退院をくり返さるゝ、役員の皆様だけでなく、ほとんど阿部幹事長の「努力で一年の行事、事業、会運営等」を乗り切っていただきました。ここに衷心よりお礼を申し上げます。この様な中、私個人もいろいろな

会にもたずさわわり、参加し、思う様に時間が取れなかったことも反省するつもりです。

また、箱根駅伝予選会では、応援のかいもなく、連続出場もかなわぬ状況になり、残念な結果となりました。

支部活動につきましては「く」にたちさくらまつり、「昭和記念公園」の「バーベキュー」、「く」にたち市民まつり、「まご火」、「く」にたちウォーキング」など、地域に密着した活動を行い、地域発展の一助になるよう積極的な活動を継続してまいりました。今後このような趣旨に添って、事業計画を策定していく予定となっております。

さらに、会員相互の親睦を深め、楽しいひと時を持つ機会、の創設が必要だと思っております。

のでホームカミングデーへの参加、母校の講演会の開催などを通じて中央大学の社会的評価の向上に少しでもお役に立てばと思っております。それには、当支部の事業、行事等に多くの皆様の積極的な参加をいただく事が会の発展につながる事になると考えております。最後に会員の皆様の「ご支援」「ご協力」を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十八年度 第二十九回 定時総会

平成二十八年八月十日

(日)午後二時より、せきやビル「エソラホール」で総会が開催されました。来賓として学員会から水津副会長、近隣支部から山崎立川支部長、森本府中支部長、山本国分寺支部幹事長、他大学から早稲田大学国立稲門会の扇田正俊会長、明治大学国立地域支部の土屋栄一支部長、慶応義塾大学国立三田会の内藤哲文会長の「臨席」を賜り、重野顧問の司会のもと小島支部長の挨拶と議事進行による活動報告と決算報告、活動計画案、予算



案が審議され満場一致で承認されました。

懇親会は平本副幹事長の進行により和やかな歓談の中、アトラクションは中央大学出身の古澤月心「氏」による物悲しくも幻想的な平家琵琶などの調べが奏でられ、最後は校歌と応援歌を元氣一杯歌い上げて閉会となりました。

石田進 記



納涼会々場

国立白門会

七月十八日・海の日に毎年恒例の納涼会が、「昭和記念公園バーベキューガーデン」で開催されました。白門会メンバーとその家族が集まる世代を超えた納涼会で、体を冷やす飲み物と趣向を凝らすバーベキューで夏の暑さを打ち払うこと行われています。

全員が揃ったところで乾杯の音頭とともに納涼会が始まった。暑さで喉がカラカラになっていたので冷えたビールがグツとしてみて生き返った心地だ。料理も盛りだくさん、特にへ鮭のホイル焼きが美味しかった。たらふく「飲んで食べて」お腹がはち切れそうでした。皆で持ちよったワイン・日本酒とバーベキューに毛鼓を打ち、時間を忘れておしゃべりに興じ、とても楽しい時を過ごしました。

幅広く活躍されている方々と納涼会を通じ刺激を受け、大変濃密な時間を過ごせたことがとても幸せに感じました。「この素晴らしい納涼会が途切れなく続いてほしいと思います。」

一昨年・昨年とへ焼き役を務め、美味しいものを料理していた弁護士

佐々木理央さん（平成十八年卒）が、昨年九月に亡くなりました。心優しき方で、これからも活躍を期待されていた方でしたのに、突然の死は誠に残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。 下村俊郎 記



中央が佐々木理央さん

第十七回「たけのこ」市民祭に参加

会計 前嶋 清

秋晴れの大学通り、国立恒例の三祭「天下市」「一橋祭」「市民祭」が十一月六日に開催されました。国立白門会は市民祭に例年通り出店し、人気の「いそべ焼き」「生唐辛子」を販売しました。いそべ焼きの材料は府中卸売りセンターの開治屋に買出し、当日炭火にこだわりの美味しく焼き上げました。唐辛子は重野顧問が八ヶ岳の別荘で半年かけて育て収穫したもので、その他会員からも古着や雑貨類を多数提供して頂きました。おかげさまでいそべ焼きと唐辛子は一時過ぎに完売、収益は会の活動資金として計上しました。参加したことの無い方は今年十一月開催予定の市民祭出店にご参加下さい。何時もと違った市民祭の楽しみ方が見つかると思います。



浅草探訪街歩き

阿部正行

六月十三日(金)に「浅草探訪街歩き」の会を開催しました。重野、堀田ご夫妻を含めて十三名が国立駅に十時集合して中央線、山手線乗り継ぎ新橋駅に下車。徒歩二十分の浜離宮恩賜公園に着、浜離宮は徳川将軍家の別邸で鴨狩りの場として広大な敷地に東京湾の海水を引き入れた堀や池、芝を配した日本庭園が広がっています。周りは、日本テレビ、電通、コンラッドホテル等の高層ビルやマンションが立ち並び、都会の中のオアシスです。そこから水上バスに乗船、勝どき橋、駒形橋をくぐって隅田川を四十五分の船旅で浅草に着きました。

昼食は老舗の「駒形どぜう」。どぜう定食、柳川定食をつつきながら、国立白門会下村さんの友人である浅草在住の鈴木利雄(昭和四十一年卒)さんから「東八拳」について、話しを伺いました。東八拳は江戸の遊戯で三

回連続して勝って、一本勝ちとするじゃんけんの種類です。キツネは鉄砲に負け、鉄砲は庄屋に負け、庄屋はキツネに負けます。東八拳の番付もあり鈴木さんは、日本東八拳技睦会で「家元空々也か楽」の名で顧問をしています。

食事後、隣にあるACEブランドで有名なカバンメーカーの「世界のかばん博物館」を見学し、浅草雷門、仲見世通り、浅草寺に足を運びました。浅草は欧米、アジアから観光客が多く、海外旅行の気分でした。

浅草のすずれにある江戸下町伝統工芸館を見学し、浅草六区に行き、全国から選びぬかれたグルメや日用品が展示している「まるごとにつぼん」で自由時間を取りました。浅草駅までの帰路は、浅草で活躍した渥美清等の芸人たちの電柱看板がかかっている伝法院通りを通り、浅草公会堂の玄関前には役者、歌手のスター達の手形があり見学しました。予定の時間をオーバーしましたが、神田駅で五時前に解散し「街歩き会」を終了しました。歩数計で一万二千歩になっていました。



浅草 駒形どぜう



浜離宮恩賜公園 中島のお茶屋



江戸下町伝統工芸館



浅草雷門

年の瀬の落語観賞

年の瀬の十一月十六日(金)「上野鈴本演芸場」で昨年に続き落語を鑑賞しました。前回は新宿末廣亭で、今回は現存する寄席の中で一番古く、歴史のある演芸場での鑑賞でした。

真冬の寒さに見舞われた当日の参加者は十四名(重野)ご夫妻・堀田ご夫妻・枝根氏・山口氏・石井氏・岡田氏・白石氏・下村氏・太田氏・阿部氏・平本氏・上田(の)皆さんでした。上野鈴本演芸場は上野広小路に面した箇所にある切符売場の上にあるので前座が呼び出し太鼓を叩き客寄をしていました。演芸場は全て椅子席で自由に飲食してあります。

昼の部は開演十二時三十分で落語、大神楽曲芸、ものまね、二味線漫談、紙切り、漫才など観客を飽きさせないように、落語の合間、合間に組込まれており多才な芸を披露していました。落語の二番目に登場した桂やまとさんは中央大学卒との事で親しみが有り、その落語に拍手に力が入りました。そして座が盛り上がる中で落語協会の会長である柳亭市馬さんの「厄払い」は大変面白く笑いを引き出し、流石名人の技術であると感じました。トリは若手の実力者柳家花緑さん(柳家小さんの孫)が務め演

目は「天狗裁き」で歯切れの良い落語で締めくくり、興奮と余韻が残るなか四時三十分すべて終了しました。

落語の後は場所を変えて参加者の有志による懇親会を阿部幹事長の手配の創業七十周年の地鶏の名店「伊勢ろく」にて参加者十一名で忘年会を兼ねて行なわれました。店は金曜日で忘年会のグループで満席状態でした。年末の寒い時の一番の料理「地鶏鍋コース」で焼鳥のフルコースと地鶏鍋で飲み放題つきで会話も弾み満腹になり心身ともに暖かくなるなか山口さんの締めで終了し散会いたしました。

上田 邦雄 記



上野鈴本演芸場

周年記念事業 「国立まとも火」について

丸本 大

クリーン多摩川の集いも、今年春で第六十二回を迎えることが出来ました。長年継続を維持出来たのは、所属した青少年育成団体はもとより、支援を続けてきた、大人のボランティア団体の総勢二十七団体の協力並びに、年中行事の一環として定着させた行政の支援も大きいと思います。

今年夏の風物誌として、七月二十三日に開催される「第三回国立まとも火」は、クリーン多摩川の三十周年記念イベントとして企画、実施され、今後も継続的に開催されることを願っています。

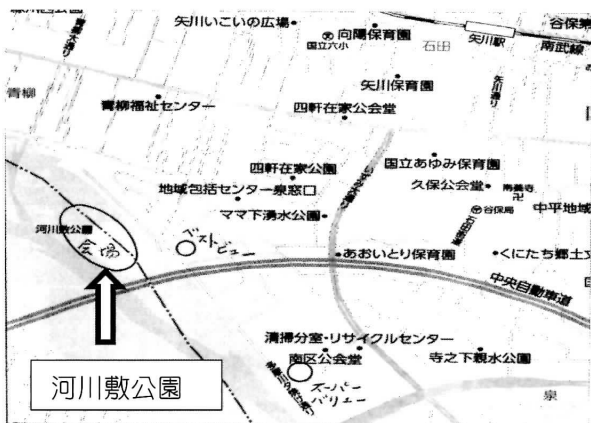
国立白門会は、協賛、支援団体の一員として参加しております。

当事業はクリーン多摩川の集い同様、協力団体や個人の協賛金によって維持されています。

今年夏のまとも火は、昨年末、急逝された前市長の新盆の迎え火ともなりますしよ。

三十年以上も続いていた谷川町と国立市の児童交流の名残でもあり、現地では四十数年も継続されている催しです。

夏の夕涼み方々、是非現地のまとも火にお出掛けください。北秋田市からも保存会のメンバーが参加します。



新年会

平成二十九年一月十五日(日)三時より、新年会が、せきやビル「アソラホール」において開催されました。

会員はもとより、令夫人、在校生、知人など三十一名が参加しました。

阿部幹事長の司会のもと、小島会長挨拶の後、アトラクションとして、『古楽器奏者によるバロック音楽と懐かしい曲』と題する演奏がありました。

奏者は阿部等さん、大宮田陽子さん、松岡由衣さんのトリオで、阿部等さんは中央大学法学部五十三年の卒業、また、国立市芸小ホールで演奏会を開催されるなど、当会とも、また、国立市ともご縁のある方でした。

演奏の合間にルネッサンス、バロック時代に使用されていたリコーダーなど様々な古楽器を説明していただき、時代によって楽器も音もこんなにも変化していくもののだと興味深い時間を過ごさせてもらいました。

前嶋会計による集合写真撮影の後、平本副幹事長の司会のもと、懇親会にうつりました。

小島会長挨拶、阿部幹事長による年間の自門会行事予定の発表と参加の呼びかけ等の後、山口顧問の乾杯の

発声で懇親会が始まりました。今年初めてのイベントとして、各分野で活躍されている中大OBの名前当てクイズが出されました。「あの人も中大のOBだったのか、知らなかったなあ・」などの声が会場のあちこちから聞かれ、中大OBとして、誇らしい気持ちになりました。

その後、恒例のビンゴゲームによる抽選会があり、会長賞、白門会賞には豪華な商品が多数取り揃えられ、外れた人には参加賞があり、全員が楽しめたイベントでした。

あちら、こちらに談笑の輪ができ、楽しい新年会でした。

また、少しでも新鮮でおいしい料理をと、わざわざ田野市の「角上」まで買い出しに行かれた阿部幹事長、前嶋会計に感謝いたします。最後は校歌、応援歌の斉唱、上田監事のエンル、そして堀田顧問の中締めがあり、盛況の中、お開きになりました。

太田昌夫 記



中央大学学術講演会

「考古学からみた邪馬台国」

弥生・古墳時代の年代研究

中央大学文学部教授
小林 謙一

講演会報告 重野和夫

平成二十八年年度、中央大学主催、学員会国立支部共催の学術講演会は、国立市教育委員会後援を得て、十月十六日(日)午後二時から、国立市せきやビル七階「エソラホール」で行われた。

はじめに、小島泰義支部長の挨拶があり、続いて司会から、我が国の神話の世界(古事記など)から更に五〜六〇〇年遡った、二〜三世紀頃の我が国「邪馬台国」女王卑弥呼のロマンについて一緒に楽しみましょうというお話があった。

この後、講師の小林先生の講演に入った。講演は、配られた資料及びパワーポイントを使って進められた。

先生は、「お集まりの皆さんは、学生と違って反応があり、大変お話しやすい。」などと冗談を言いながら楽しく、次のような内容で講演が進められた。

一、邪馬台国論争と魏志倭人伝

中国の史書・三國志魏書 第三〇巻
烏丸鮮卑東夷伝倭人伝(魏志倭人伝のこと)の作者は、陳寿(ちんじゆ)。史書

は三三九九年に朝貢された。この史書、魏志倭人伝、倭人の条について、話が進められた。

この頃、日本列島に女王が治める、邪馬台国という倭国連合があったとされる。しかし、謎が多く、邪馬台国のあった場所はどこか、江戸時代から現在まで、九州が近畿か、またそれ以外の地域か、歴史学者の間で論争になっている。

論争の最大の焦点は、魏志倭人伝に示された、わずか二十字余に書かれた史料は貴重だが、不明瞭な記述があることされる。「邪馬台国がどこにあるのか」、「国内の歴史文献に国の名がみられない」、「卑弥呼の役割・地位の不明」などである。また、この資料が正しいのか否か、他の資料と比べようもなく、文献資料として難しい課題を内包している。

その上、考古学的な資料からも、遺跡や遺品など決定的な判定材料がない状態。等である。

魏志倭人伝の翻訳された内容について、次のような説明があった。

①魏の領土の帯方郡(朝鮮半島北部)から、邪馬台国に至る道程。狗邪韓国、对馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、不彌国、投馬国、邪馬台国の道程についての考察。

②南の狗奴国の男王と、女王国邪馬台国とは、不和で戦争状態であった。

③租税や賦役の徴収が行われ、国々にこれらをためる倉がつくられていた。市場が各地に開かれ、大倭という官が之を監督していた。

④倭国には、元々男王が置かれていたが、国家成立から七〜八十年経た頃、政情不安が起き、暦年に及ぶ戦乱の後、女子を共立し王とした。その女王が卑弥呼である。

⑤女王は、鬼道(注)によって人心を掌握し、既に高齢で夫は持たず、弟が国の支配を補佐した。卑弥呼は、千人の侍女に囲われ宮室、楼觀で起居し、巡らされた城壁や柵、そして多数の兵士に守られていた。王位についてから人と会うことはない。

(注)本文には、「事鬼道能感衆年」(鬼道を事とし、能く衆を感せず)とある。当時中国では、仏教、儒教以外の邪術、妖術を鬼道とした。または、神霊や死者の靈魂と会話し、得られた知見・判断を神のお告

げとしたなど。本当の意味は不明。鬼道は「後漢書」の劉焉伝に出てくる。

⑥女王は、景初二年以降、帯方郡を通じて数度にわたって、魏に使者を送り、皇帝から親魏倭王に任じられた。

⑦卑弥呼が、死去すると大きな墳墓がつくられ、百人が殉葬された。その後、男王が立てられたが、人々はこれに服さず内乱となり、千人が死んだ。そのため、卑弥呼の親族で十三歳の少女の台(とよ)と書與とも記されている(が王に立てられた。等

二、邪馬台国所在地論争

①論争は、江戸後期から新井白石の大同和国、筑後国山門郡説。国学者本居宣長の九州熊襲説を唱えた。その後現在までの主流は、「畿内説」と「九州説」。さらに、邪馬台国が九州から畿内に移動して、ヤマト政権となったとする「東遷説」がある。

②魏志倭人伝に書かれた順序に従って、方向を九十度替えたり、距離を修正してたどる畿内説(連続説)。伊都国から先の距離を修正して到達する、九州説(放射説)とある。

三、考古学からみた邪馬台国

小林先生の専門の考古学の立場からの説明があった。

① 邪馬台国(二〜三世紀)は、弥生時代

② 末期く古墳時代初頭に相当する。
 ③ 三国志の記述と、考古学的事実の整合性について、検討する必要がある。

④ 卑弥呼の墓は、大型の弥生墳丘墓または、最古の前方後円墳と考えられる。

⑤ 魏から持ちつた鏡について、三角縁神獸鏡しんじゆくわんが考えられてきたが、矛盾が多く不明。景初四年と書かれた三角縁神獸鏡について、中国では景初四年という年号はない。

⑥ 墳墓や宮殿跡？等の存在から、纏向むすむすが有力だが、絹、鉄の出土量から九州説も。

四 風俗の記述

魏志倭人伝に見られる倭国の風俗についての、説明があった。

① 男子はみな、顔や体に入れ墨を施している。人々は、朱や丹を体に塗つてゐる。

② 食事は、籩豆ひんとう(たかつき)を用い、手で食へる。(箸を使わない)

③ 男子は、冠をつけず、髪を結つて髻をつくり、女子は、さねはら髪。

④ 着物は、幅広い布を横で結び合わせているだけである。

⑤ 兵器は、矛、盾、木弓を用いた。
 ⑥ 特別なことをするときには、骨を焼

き、割れ目を見て吉凶を占う。
 ⑦ 法を犯したときは、軽いものは妻子没収し、重いものは一族を根絶やしにする。等

五 最古の古墳

三世紀の古墳から、考古学的に邪馬台国・卑弥呼を探る説明があった。

① 前方後円墳、前方後方墳、四隅突出型古墳等の、形状や竪穴式石室、木棺について考察。

② 四神四獸鏡を中心とした副葬品について考察。

③ 奈良県箸墓古墳(一八〇M)など、三世紀の墓は、卑弥呼あるいは台余の墓か？等。

六 講演会を終えて

「この度の、講演会(考古学から見た邪馬台国)」に、聴講者がどれほど集まるのか、少々不安であった。しかし、当日予想を超える約百名の市民、会員の参加者が会場を埋め尽くし、熱心に聴講していた。用意した資料も無くなるほどであった。また、講演後、小林先生に質問する人が多く、列が出来る状態であった。

そのわけは、「邪馬台国・卑弥呼」というテーマが、永遠のロマンとして、私たちに受け継がれて来ていることに由来すると思う。二〜三世紀の日本という

国を、記録した中国の史書、魏志倭人伝の中に示された「この国の生い立ち」。そこに夢を追い続けてきた、幸せの証でもある。なぜか、君臨したとされる卑弥呼には、胸が高まるのである。しかし、魏志倭人伝の中に、邪馬台国と卑弥呼について正確なメッセージは、示されてない。

著者の陳寿は、魏、呉、蜀の三国が覇権を巡って争った激動の時代を、魏を正統王朝とし「三国志」六五巻としてまとめた。魏を舞台とした魏書の中に、「魏書東夷伝・倭人の条」として倭国が出てくる。

陳寿自身が倭国まで来て、書いたものでなく、伝聞、参考資料を使って書かれた。はじめから曖昧さがある。それ故、邪馬台国が日本のどこにあったのか、魏書東夷伝の最たる矛盾「示された道筋をたどっても邪馬台国にたどり着かない」のである。

まさに「陳寿からの贈り物」が、何世紀にも亘って、アカデミック論争となり、皮肉にも希望、ロマンを与え続けている。についても過言でないだろう。

この度の講演会で、より多くの知識、情報を得ることが出来たと思っただが、依然として疑問は残り、謎は更に深まった。

これからは、「畿内・纏向遺跡や九州エリアを訪ねたい。」「古墳時代の遺跡の発掘、考古学上の発見やニュー スに神経を研ぎ澄ませます。」「邪馬台国、卑弥呼がもたらすロマンを楽しみたい。」「と、聴講された皆さんが感じられたのではないか。終わりに、「講演いただいた小林謙一先生に感謝と御礼を申し上げます。



盛況の会場



一階ホール案内板

アンディ・ウォーホルへのオマージュ シルクスクリーン版画、六十の手習い

北井 治徳

『六十の手習い』で始めた趣味の「シルクスクリーン版画」は、すでに十年を越えている。

シルクスクリーンにあまり馴染みがない人でも、アンディ・ウォーホルと云えば思い出してもらえらるだろう。キャンベルスープ缶やコココーラ、またマリリン・モンローやエリザベス・テイラーのポトレットなどに鮮やかな色彩あふれる作品を次々に発表し、一九六〇年代ポップアートの寵児となった。彼の制作技法の主流がシルクスクリーンであった。

孔版画技法の一種で、シルク（現在はテトロン）の布地を木の型枠に張り感光乳剤を塗り、絵柄以外の部分をインクが通らないようにした版を製版し、プリント（印刷）する技法である。

今から四〇年ほどの昔、転勤でニューヨークに住んでいた頃、ウォーホル作品に直に出会い、魅了され、休日には美術館やギャラリーに作品を追いかけていたものである。

ある時取引先の画商からアンディ・ウォーホルのパーティーの誘いを受けたことがある。日本の建築家、磯崎新が古い劇場を改造したディスコのオープニングに合わせたもので、ウォーホルの取り巻きが企画したも

のだが、結局本人が現れることはなかったし、また当時噂の「替え玉」も来なかった。

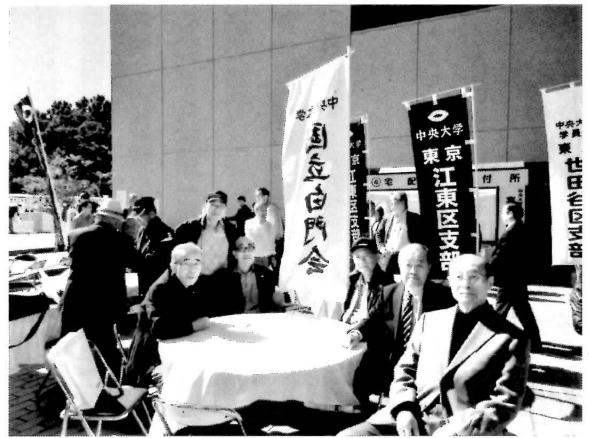
その一年半後、ウォーホルは五十八歳の生涯を閉じることになるのだが、従って、残念ながら生前本人に会える機会を逸してしまったのである。

後年サラリーマンをリタイアした後、自分でも真似事をしてみたくなり、荻窪のカルチャー教室で仙台シルクスクリーン協会会長の手ほどきを受け、その後月二回、若い人たちに混じって今でも制作を楽しんでいる。

時あたかもキリンラガービールがこの四月から「アンディ・ウォーホルデザインパッケージ」のキャンペーンを始めた。この時とはばかり、マリリン・モンローの冷たい頬に口付けしながらラガービールを飲んでいる毎日なのである。



H28. 10. 23 中央大学ホームカミングデー



H28. 4. 3 さくらフェスティバル



私と『四国遍路』

おんろの勧め

二宮 巍

私は昭和五十八年年、四十八才で脳梗塞を患い、右の手足が多少不自由になったのと、多少の言語障害が残りました。都立神経病院で脳の血管のバイパス手術を受けました。

一生懸命リハビリも頑張りました。手足も回復して来ました。

その九年後、平成四年、五十七才の時には大腸ガンを患い、ガンの摘出手術を行いました。

この年の夏をもつて会社を退職しました。

ありがたく生かされている命に感謝する気持ちもあって、四国遍路を思いつきました。

幸い、自由な時間ができ、ガンの保険金も入り、留守も心配なしで「四国八十八カ所バス遍路」の旅に出ました。

十年後に辰野和男著『四国遍路』（岩波新書）を読みました。ここには「歩き遍路」のことが書かれています。私にも歩き遍路が出来るかな？一度歩いてみようかと決心しました。

体力を試すつもりで白馬岳にも登りました。大雪渓、エーデルワイスや駒草と云った可憐な高山植物が出現してくれ、感動しました。各寺院に

納める「般若心経」の写経も準備しました。

平成十四年八月十七日「歩き遍路」のスタートです。私は愛媛県今治市にある五十四番札所延命寺からスタートしました。

何故延命寺かと申しますと、延命寺には先祖のお墓があるのです。戦時中、私は今治市に疎開していましたが、在所の乃万国民学校を昭和二十二年に卒業しました。忘れもしませんが小学五年生の昭和二十年八月五日、今治市は米軍の空襲に遭い丸焼けになりました。B29が焼夷弾を落とすべく中を夢中で逃げた思い出があります。翌日、八時頃、空襲警報のサイレンが鳴ったのです。思えばそれがあの時、広島へ行きが帰りのB29だったでしょう。

余談はさておき、四国遍路は弘法大師空海ゆかりの寺々を回る旅です。空海が若い時に修行したという二十一番大龍寺の捨身ヶ岳、二十四番最御崎寺の御蔵洞を廻り空海を偲びました。

又、安芸市では三菱の創業者岩崎弥太郎の生家を訪ね、桂浜では幕末の志士坂本竜馬の像を見ました。足摺岬にある三十八番金剛福寺に着いた時には、足のためがつぶれ、足を引きずって歩いていました。それでも不思議に帰りたいとは思いません

んでした。

風に吹かれ、海の匂いをかき、雨に打たれ、山の登り降りする、自然の中にいる自分が楽しいのです。何よりも一杯の水、梨や葡萄のお接待が励みになるのです。車のお接待もありました。ちよつと足が痛い時、足摺岬から宇和島まで乗せてもらいました。

無事に今治の延命寺に戻った時には涙が出ました。私の場合、四十八日間、千四キロを一周することが出来ました。

その後同じ国立市に住むM先輩が同行して欲しいと云うので五度に分けて一周する区切り打ちで、平成十六年と十七年に分けて廻りました。続いて平成十九年と二十年にかけて同じ国立に住むH女史、M氏、Y氏など四人で同じく区切り打ちで廻りました。

四国を四回廻ると「先達」の資格が貰えます。「先達」として、十人をジャンボタクシーでご案内したこともありま

す。皆様、歩くことは心と体の健康に一番いいと云われています。何よりも認知症対策として有効です。一度四国を歩いてみませんか。

先程「先達」の話をしました。この先達と云うのは「四国八十八ヶ所霊場会」が認定する資格のことで、云うならば四国遍路お案内人に相当するもので

す。

この制度は昭和三十三年に「四国霊場会」が発足と同時に制度として確立したもので、認定者数は、現在一万余人を超えています。

平成二十三年五月に「東日本先達会」が設立されました。中部には「中部先達会」「関西には「関西先達会」があり、三十年余にわたって活動されてきました。「東日本先達会」は設立されて僅か五年の先達会です。

平成二十二年を機に関東にも先達会を創ろうと、我々数人が当時霊場会会長であった坂井智宏大僧正（現四国二十六番金剛頂寺住職）のご指導のもとに発足させたのが現在の東日本先達会であります。

今、坂井住職は金剛頂寺の海岸近くに、「空海遍路文化会館」を創ろうと骨を折っておられます。我々も、この企画のお手伝いが出来ればと考えております。



母を看取って

平本聖子

昨年一月に、母を自宅で看取るこ
とができました。エッセイを書くよう
に言われましたが、今はまだ思いだ
すのは母のことばかりです。母は早稲
田大学文学部哲学科を卒業して、哲
学の教鞭を執っていました。早稲田大
学が好きで、子守唄は早稲田の校歌
でした。

それで私は寝つきが悪いのかもしれ
ません。(でも私は中央大学が好きに
なり、体調を崩しながらもやっと中
大を卒業出来た日、母は「お互いに好
きな大学を卒業出来て、ほんとうに
よかったね。」と喜んでくれました。
又箱根駅伝で中大と早大がトップグ
ループで争っていた頃(または是非そう
なって欲しい)母は「あなたの好きな
中大を応援してあげるね。」

と、本気で応援していました。国立白
門会には、行事に誘うと必ず参加し
て会員の皆様と親しくさせていただ
きました。

だれもがいつかは、いろいろな形で、
親の死に向き合わなければならぬ

でしょう。たぶん私は幸せな向き合い
方をさせてもらったのだと思っていま
す。ふりかえると、介護という決して
短くはない日々で、辛いと感じたのは
僅かな時間でした。母はひとり残し
てゆく娘の私に、人間の肉体が 日毎
自然に旅立つ準備をしていくのを見
せてくれました。そして、その状態を
自らの言葉で解説することもありま
した。又、訪問看護の看護師さんへ
パーさんたちにもめぐまれ、母の天
然のユーモラスなところがうけて、む
しろ またとない楽しい時を過して
いた気もします。母を見送ってしま
らなくは、外出した時、携帯に母から
着信がないことなどに悲しくもなり
ましたが、私が落ち込んでいると、母
も悲しむだろうと思ひ、元気を出す
ようにしています。

毎年 母の日には赤いカーネーシ
ョンをプレゼントしていました。子供
の頃、母のいない子には白いカーネー
ションを...と聞いていました。(今は
そのような慣習は一般的ではないよ
うですが。)今年の母の日には 白
いカーネーションを持ってお墓参りに行こう
と思っています。

『平本さまのお母様に感謝』
当会の活動には格別なるご支援を
いただきました。会員一同心から御礼
申し上げます



旗を持っておられるのが平本さんのご母堂 H10.11.29

茅ヶ崎から国立に移住しました

森 道雄 (昭和三十六年卒)

神奈川県茅ヶ崎の自宅と信州を行
き来するようになったのは、定年退職
してからです。妻がうつ病を患ってい
た為、退職後の転地療養先として蓼
科山麓の白樺湖に近い姫木平の山荘
を選び、二地域居住の生活をスター
トしました。グリーンシーズン(五
十月)は信州で、妻と味噌作り、干柿
作り、ピザ焼き窯作り等に挑戦し、標

高千三百Mの高地に休耕地二百坪を
借り、俗に言う田舎暮らしをしてい
ました。

妻はハーブを育て、私は信州の遅い
桜が咲く頃から最高のシーズンを到
来する夏までは畑仕事です。野菜の
収穫の合間をみて、ニッコウキスゲ等
が咲く車山、霧ヶ峰を歩き、日帰り温
泉につかり、涼しい山荘のテラスでグ
ラスを傾ける...至福の時を味わって
いました。静かな秋を迎え、妻が作る
クリスマス用のリースに使うアケビ
菓を採取すると冬場は茅ヶ崎で過こ
しました。

二地域居住は、居住のメンテナンス、
税金、車のガソリン代を考えると忙し
く、お金がかかりますが、避暑地の信
州と比較的暖かい茅ヶ崎では冷暖房
が要りません。また山荘仲間で小さ
な図書館を立ち上げるなど、地域活
動にも参加し、忙しいながらもハリの
ある日々を送りました。

しかし、三年前にこの生活にピリオ
ドをつけて、昨年十二月に国立に住ま
いを移しました。茅ヶ崎白門会を退
会し、新たに国立白門会に入会しま
したので、これからは皆さんと一緒に
活動していきたいと思っています。

後悔、先に立たず

市川良夫

私は昭和二十一年、終戦の翌年の三月に、病院船で帰国する病床の母と付添の長女の姉を除き、他の姉二人と共に三人で、中国河北省の塘沽から米軍の上陸用舟艇の引揚船で父の郷里の山梨に引き揚げてきました。父は、漢口ドーリットル事件の嫌疑で上海の拘留所に移送・抑留されたまま、実家の一室に二人で居候をしていました。

話は飛びますが、私は、四月から、どこにか発足したばかりの地元の新制中学校に通学できるようになりました。クラスは荒れ放題で、まともに勉強できる状況ではありませんでした。

話は再度飛びますが、昭和二十九年、二年生の秋に中大の済美会研究室への入室を許されました。合格者は二年生が二人、三年生と四年生が各一人、計四人でした。受験者は二百人でした。

一年生に入学当初の頃は、初めて学ぶ法学概論が面白く、自分に打って

付けの学問だと、嬉しく興奮していま

した。法律時報、ジュリストなども購読し、阿部次郎の「三太郎の日記」なども古本屋で買い求め、中大合格の興奮に酔い痴れていました。岩波の「世界は装丁がシンプルで美しく、文章も簡潔で締まっていて、内容も示唆に富むもので、とても魅力的でした。ただ「世界の潮」の瀾は内容が偏っているように思えて、右傾の私には好きになれませんでした。ある日、父から「世界」を購読しているようだが、官憲が思想調査をしているから、購読を取りやめるように」との忠告のハガキが来ました。私は父の外務省時代の友人宅の一間に居候をしていたので、その友人の忠告があったのだと、分かりました。

一年生の終わり頃、「司法試験を目指すのには、研究室に入るのが良い」と聞いていましたので、勉強の仕方が皆目分からないまま、憲法の前文から第百三条まで、全文を丸暗記しました。それから考えると、これは法律の条文を憶え、理解するのに重要な学習方法の一つで、これが結果的にプラスに働いたようでした。

筆記試験は、英語長文読解一問、憲法問題一問、面接試験、の以上三問で

した。

面接試験では、憲法四十一条の「国会の地位と立法権」について説明を求められました。「六法全書」のページをめくる指先が震えていました。

面接試験の試験官には、俳人の石原八束先生もいらつしました。石原先生には、その後も二回程お便りも頂き、済美会研究会の会合に顔を出すようにとの温かいお誘いのお言葉頂きましたが、その折角のお言葉を反故にして長く打ち過ぎたまま、もう今では、お会いできる機会がないのが残念で、また申し訳なく思います。もう昔のことと、記憶も臙げになつていますが、真夏の灼熱の太陽の照りつける日中、先生の葬儀にお伺いできたことが、唯一の慰みになっています。

当時研究室は、中庭二階の緑色板壁の生協の隣にありました。強烈な紫煙の漂う階段と廊下をギンギシと軋ませながら渡り、室員が二十人程いる一室で、各員に机を一つ与えられ、私はこれからの研究室の一員として司法試験を目指すのだという希望に燃えていました。ただ、私が入室した時は、合格者は一人のみで、高齢の浪人組が多く、二・三年で合格するの

はとても無理だろうとの絶望的な思いもあり、別の道を探ることにしました。

大学四年生の時、高校同級生の兩宮眞也さんが突然研究室に訪ねて来られて、研究室への入室方法や勉強方法などを尋ねられました。私が研究室に入ったという情報は、同級生の間にはたちまち広がっていたのでした。眞也さんは、高校卒業と同時に地元銀行に就職したのですが、一念発起するところがあつたのだと思います。正法会に入会し、一年で司法試験に合格、中国の大学で教鞭をとるなど、今も多方面で精力的にご活躍中です。

後に弁護士とされる市橋先生が昼食時に、サンダル履き姿で中校友会研究室のあつた中大講堂の辺りを歩いておられるのを遠目に拝見することもありました。サンダル姿は法学部学生の憧れのファッションのようなものでした。

お知らせ

国立白門会ニューース前年発行(五〇号)は第二回支部会報コンテストにおいて、「努力賞」を受賞しました。

平成28年度 国立白門会決算書

自平成28年4月1日

至平成29年3月31日

単位:円

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
年会費	192,000	195,000	印刷費	84,000	90,000
総会費	100,000	120,000	総会費	169,995	150,000
行事活動特別収入	144,458	125,000	支部渉外費	85,540	80,000
寄付・祝金	80,000	80,000	親睦行事費	168,820	350,000
学術講演会	100,000	100,000	通信費	14,458	30,000
支部活動強化費	80,000	100,000	会議費	40,464	50,000
雑収入	10	0	事務用品費	10,649	20,000
前年度繰越金	352,862	352,862	学術講演会開催費	90,991	150,000
			雑費	0	26,000
			予備費	26,308	26,862
			積立金	100,000	100,000
			次年度繰越金	258,105	
合計	1,049,330	1,072,862	合計	1,049,330	1,072,862

平成29年5月11日

会 計 前 嶋 清 印
 会 計 監 事 二 宮 魏 印
 上 田 邦 雄 印

平成29年度 国立白門会予算案

自平成29年4月1日

至平成30年3月31日

単位:円

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×65	195,000	印刷費	白門会ニュース他	90,000
総会費	4000円×30	120,000	総会費		160,000
行事活動特別収入	さくら祭、市民祭	125,000	支部渉外費	他支部総会祝金	90,000
寄付・祝金		80,000	親睦行事費	納涼会等	310,000
学術講演会	中央大学	100,000	通信費	会員連絡他	30,000
支部活動強化費	中央大学学員会	80,000	会議費	役員会他	50,000
			事務用品費		20,000
前年度繰越金		258,105	学術講演会開催費		150,000
			雑費		26,000
			予備費		32,105
合計		958,105	合計		958,105

平成28年度特別会計別途講座に積立金を10万円計上

平成28年度活動報告 28.4.1~29.3.31	平成29年度活動計画案 29.4.1~30.3.31
4/ 3(日) 「さくらフェスティバル」に参加	4/ 2(日) さくらフェスティバル
6/ 3(金) 浅草探訪街歩き	5/ 12(金) ちゃんこ鍋の会と両国施設巡り
6/ 12(日) 第39回定時総会「エソラホール」 国立白門会ニュース50号発行	6/ 18(日) 第40回定時総会「エソラホール」 国立白門会ニュース51号発行
7/ 24(日) 「国立まと火」に参加	7/ 17(祝) 納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
7/ 18(祝) 納涼会「昭和記念公園」バーベキュー	7/ 23(日) 国立まと火
10/ 10(祝) 体育の日「くにたちウオーキング」	10/ 9(祝) 体育の日「くにたちウオーキング」
10/ 15(土) 箱根駅伝予選会「昭和記念公園」	10/ 14(土) 箱根駅伝予選会「昭和記念公園」
10/ 16(日) 中大学術講演会「エソラホール」	10/ 15(日) 中大学術講演会「エソラホール」
10/ 23(日) 中大ホームカミングデーに参加	10/ 22(日) ホームカミングディ
11/ 6(日) 「くにたち市民まつり」に参加	11/ 未定 くにたち市民まつり
11/ 20(日) 秋のグリーン多摩川	11/ 19(日) 秋のグリーン多摩川
12/ 16(金) 上野鈴本落語観劇会	12/ 8(金) 銀座・築地ぶら散歩
1/ 15(日) 新年会「エソラホール」	1/ 14(日) 新年会「エソラホール」
3/ 12(日) 春のグリーン多摩川	3/ 11(日) 春のグリーン多摩川
○ 国立白門会ニュース50号発行	○ 国立白門会ニュース51号発行
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催	○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催